



いよいよ11月が終わりを迎えようとしています。冬本番がそこまで来ています。

自分が一番自分を知らないかもしれない

3年生で算数の授業が行われているようです。ちょっと聞き耳を。

『みかんが□こあります。1人に4こずつ配ります』

「□は、4の段だといいと思います」

「16でもいいわけだ」

「だって、4の段だと割り切れるでしょ」

「それだと何人分かわかりやすいね」

なるほど、発言がつながりあっている。友達の意見をしっかりと聞き、共感しあいながら、初めて学ぶわり算の意味をみんなで見つけていこうとする姿がとても素敵です。この学習は、さらに4の段ではないとすると…と、あまりのあるわり算へと、“みんなで”学びを深めていくことになりました。

そんな3年生の目標は、「人けんをまもる」「ルールをまもる」「いいわけしない・うそをつかない」という他者とのかわりに重点を置いたものです。この算数の授業のように、友達とかわり合いながら学ぶ姿こそが、未来の学びの姿なのかもしれません。

キーワードは「対話」です。通信no.13にも対話についてお伝えをしましたが、今号は自分にとっての対話の意味を考察してみたいと思います。

よく「自分のことは自分が一番わかる」という言葉を聞きますが、本当でしょうか。私は、逆に自分のことが一番わからないのが自分だと思っています。ちなみに、友達や家族などの他者の顔は常々見ているでしょうが、自分の顔はなんらかの媒介（鏡や写真など）がない限りは、決して見ることはできません。

そう、自分が一番ミステリアス。

自分自身をじっくりと観察することはとても難しい。だから、自分の鏡となる他者が必要です。安心して話ができる友達や家族（＝他者）がいるからこそ、自分自身を開き、言葉を紡ぐ中で、「あ～私ってこんなことを言いたかったんだ（したかったんだ）」と気づく。「あ～自分はこんな人なんだ」とわかる。「あ～こうなりたかったんだ」と夢見る。

他者の受容の中で自身を開示することで見えてくる、本当の自分。通信no.29で紹介したジョハリの窓風に言えば、「盲点の窓」にあたる場所が開けてくる感じですね。そうやって、人は人の中で生まれ、育ち、そして他者の育ちに寄り添う。

よく、学びに一番必要な資質は何かと問われた時、「謙虚さ（慎み深さ）」だと思ふ時があります。つい、相手の言葉が自分の思いとは違い、反発や違和感を覚えて、素直に受け止められないこともあります。対話の中で、自己を開示し、他者を受容するためには、「謙虚さ」が不可欠。あなたが見えていなかったあなた自身が、もしかしたら色濃く表現されているのかもしれないですね。

